

式場隆三郎による日本点字図書館への後援： 日本医家芸術クラブ機関誌『医家芸術』の 記事調査より

Support for The Japan Blind Library by Ryuzaburo SHIKIBA:
From the article survey in the Journal “Medical Family Arts”

NISHIWAKI, Tomoko

西 脇 智 子

日本語コミュニケーション学科准教授

和文抄録：

式場隆三郎が「盲人福祉」に尽力したことはよく知られている。日本医家芸術クラブの初代委員長である式場隆三郎が機関誌『医家芸術』を編集した時期は日本点字図書館後援会長の活動期と重なる。そこで、同機関誌の記事調査を試みた結果、日本点字図書館に関連する記事の掲載が35件認められた。特筆すべきは本間一夫による寄稿文であった。

英文抄録：

Ryuzaburo SHIKIBA is known to have been instrumental in the “welfare of the blind.” He was the first chairman of the Japan Medical Family Arts Club and compiled the journal “Medical Family Arts” during his tenure as a chairman of the Japan Braille Library. An attempt to examine the articles published in the abovementioned journal revealed that 35 articles pertained to the intention of raising awareness for the support of the Japan Braille Library. The contribution by Kazuo HONMA was particularly noteworthy.

キーワード：式場隆三郎、日本医家芸術クラブ、機関誌『医家芸術』、日本点字図書館後援会、本間一夫、点字本ヴァン・ゴッホ

Keywords : Ryuzaburo SHIKIBA, Japan Medical Family Arts Club, Journal “Medical Family Arts”, Japan Braille Library Supporters’ Association, Kazuo HONMA, Braille Van Gogh

はじめに

社会福祉法人日本点字図書館の発展は数多くの人々の善意と奉仕の心によって今日まで支えられてきた。『日本点字図書館五十年史』の感謝録「忘れ得ぬ人々」^{註1}には、「発展のエポックを画する力となったことを忘れてはならない」として、日本点字図書館後援会の会長に就任し支援活動に情熱を傾けた式場隆三郎(1898-1965)の名が掲げられている。この「発展のエポック」とは、隣接地買収の際に日点後援会長を引き受けられたこと、さらに世界盲人福祉会議への出席を積極的に援助し欧米訪問の機会をつくったことを指している。この感謝録には、式場隆三郎が「自身の関係する守田勘弥後援会や医家芸術クラブなどの催し物の度ごとに足を運び、当館の実情を訴え積極的に寄付を呼びかけられた」と記されている(日本点字図書館編集委員会編1994:154)。

日本点字図書館は、創設者の本間一夫と式場隆三郎とのめぐりあいから70年の節目を迎える。これを機に「日本点字図書館後援会の史実」を探求するため、筆者らは日本点字図書館が所蔵する資料を発掘し、情報の収集・分析作業を重ねてきた^{註2}。「ていだん：盲人福祉に生きる」(本間一夫・加藤善徳・式場隆三郎)が掲載されている『医家芸術』の所蔵は確認しているものの、『日本点字図書館五十年史』に記された「医家芸術クラブ」に該当する関連資料の発見に至っていない。

奇しくも、式場隆三郎が日本点字図書館後援会の会長に就任した時期は、日本医家芸術クラブ^{註3}の初代委員長として機関誌『医家芸術』を編集した時期と重なっている。そこで、掲載記事の所在を把握するため、式場隆三郎が編集した日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』を対象に記事調査を試みることにした。

この調査は、2021年2月から10月にかけて国立国会図書館および日本医家芸術クラブ事務局が所蔵する機関誌『医家芸術』を閲覧する方法で実施した。調査対象となる『医家芸術』の閲覧順は、『日本点字図書館五十年史』の「できごと」に照らして、①日本点字図書館後援会創立準備の懇談会を開催した時期(1958年11月以降に発行された機関誌)、②本間一夫と加藤善徳の世界盲人福祉協議会参加費調達のため、式場隆三郎が渡米後援会結成した時期(1964年4月以降に発行された機関誌)に着目して関連記事の所在を探った後に、③『医家芸術』通巻100号すべてのページを読み進める方法で実施した。

本研究の目的は、式場隆三郎が編集した日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』にどのような日本点字図書館関連記事が掲載されているのかを把握することである。

1. 記事調査の対象

式場隆三郎は、日本医家芸術クラブの初代委員長として機関誌『医家芸術』の編集を重ねた。1957年9月1日発行の創刊号から発行した通巻100号のすべてのページを読み進める方法で記事調査を実施した。なお、国立国会図書館の蔵書に欠本があったため、第9巻第1号(図1)、また特集号などは関連記事が多く合本のために読みづらさがあり、日本医家芸術クラブ事務局が

所蔵する機関誌や関連資料の閲覧を依頼した。

図 1 日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』



2. 記事調査の結果と考察

式場隆三郎が編集した通巻100号にわたる日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』には、「日本点字図書館」に関連するどのような記事が掲載されているのだろうか。そこで、筆者は、1957年9月1日発行『医家芸術』創刊号＝第1巻第1号から通巻100号＝1965年12月1日発行の第9巻第12号に至る機関誌の全ページを読み進めた。今般の記事調査の結果を以下に報告する。

2-1. 記事調査の結果

日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』の創刊号（＝1957年9月1日発行の第1巻第1号）から通巻100号（＝1965年12月1日発行の第9巻第12号）の全ページを読み進めた結果、「日本点字図書館」に関連する記事が散見された。そこで、発行された100冊の機関誌『医家芸術』を3つの時期、すなわち、(1) 日本点字図書館後援会の設立準備以前の時期（1958年11月以前に発行された機関誌）、(2) 日本点字図書館後援会創立準備の懇談会を開催した時期（1958年11月以降に発行された機関誌）、(3) 本間一夫と加藤善徳の世界盲人福祉協議会参加費調達のため、式場隆三郎が渡米後援会結成した時期（1964年4月以降に発行された機関誌）に分類した。そして、関連する記事がいつ発行されたどの機関誌に掲載していたのかを明らかにするために、掲載誌の発行日・巻号・記事の種類や記事の執筆者名・タイトル・掲載ページ等の情報を併記して作表した。また、日本点字図書館および本間一夫に関連する箇所には黄色マーカーを引き、該当する記事を時系列に示した（表1）。

なお、『医家芸術』通巻100号以降にも関連記事が掲載されていたため、(4)として、通巻

100号以後の『医家芸術』に掲載された日本点字図書館に関連する記事を補記している。

表1 『医家芸術』における「日本点字図書館」に関連する掲載記事について

(1) 日本点字図書館後援会の設立準備以前の時期（1958年11月以前に発行された機関誌）

発行年	寄稿文の場合：上段＝発行日／巻号／記事の種類、下段＝執筆者名／タイトル／掲載頁 そ の 他：上段＝発行日／巻号／記事の種類、下段＝執筆者名／タイトル／掲載頁／該当記事
昭和33 (1958)	8月1日発行 第2巻第8号＝寄稿 本間一夫「もっと点字の本を」＝42-43頁

(2) 日本点字図書館後援会創立準備の懇談会を開催した時期（1958年11月以降に発行された機関誌）

発行年	寄稿文の場合：上段＝発行日／巻号／記事の種類、下段＝執筆者名／タイトル／掲載頁 そ の 他：上段＝発行日／巻号／記事の種類、下段＝執筆者名／タイトル／掲載頁／該当記事
昭和34 (1959)	4月1日発行 第3巻第4号＝編集後記 式場隆三郎（3月9日付）＝64頁 私の病気もその後経過よく、2月21日に退院した。（中略）キャノン・カメラ（原文のまま）の工場で、シンクロリーダーの実験をみせてもらった。発明者の東京工大の星野教授が親しく説明して下さったが、すばらしいもので感心した。 私は日本点字図書館の後援会長として盲人のために耳でできく書物の製作を考えていたのだが、医学面への応用もたくさんあるので、本クラブでも実験をみる会をひらきたい。これが普及したらカルテは音をだすようになるし、心電図やレントゲン写真も診断のことがきけるようになる。近く本誌にも解説記事をのせたい。
	5月1日発行 第3巻第5号＝クラブ通信 成川忠明「企画・庶務室より」（3月30日付）＝63頁 3月20日。夜6時、両国守田勘弥氏宅。式場、橋爪、横尾、内藤氏それに成川等。4月15日 新宿第一劇場後援会と 点字図書館設立後援会 との協力の件。
	6月1日発行 第3巻第6号＝クラブ通信 成川忠明「企画・庶務室より」（4月30日付）＝63頁 4月15日（午）後4時、新宿第一劇場。勘弥後援会。
	10月1日発行 第3巻第10号＝編集後記 式場隆三郎（9月7日付）＝64頁 （前略）熊本で癪歌人の明石海人の世話をされた内田守人氏に久々でお逢いして、国立癪院の恵楓園を見舞った。 この8月から日本点字図書館と文芸春秋（原

文のまま)そしてソニーと一体になって、盲人たちのために耳でできく文芸春秋のテープをつくり、全国へおくり始めた。その一本が熊本癩院にもいっていたので、私のために盲人たちがあつまりいろいろ希望をのべたり、話しあう機会をつくってもらった。(中略)今度テープで耳できけるものできたことを心から感謝していた。しかし、やはり点字本もほしいというので、これから私はそのためにももっと力をつくすことを約(束)してきた。

11月1日発行 第3巻第11号=寄稿

内田守人「式場先生と明石海人」= 47-49頁

今年は暑かったが、その暑い日の、とくに暑いといわれている熊本に式場先生を迎え、気持が暑くなる「ハンゼン」氏病者のことどもを語り合った。(中略)私は昭和12、3年頃東京の某所で、当時全生病院で活躍していた日戸修一君と、一杯屋から出てこられる先生にひょっこり出会い、北条民雄や一般の癩文学の紹介について計画しておられることを知った。間もなく「中央公論」に北条のことが紹介され、昭和14年の秋には先生編集の癩文学集「望郷歌」が山雅房から出版された。この本が私の書架に残っていたのを引っぱり出して、巻末に先生が書かれた「癩者の医学と文学」と題する文章を再読して、いまさらながら先生の「ハンゼン」氏病者に対する情熱に感じ入った次第である。(中略)翌日先生の日程が空いていることを知り、国立菊池恵楓園見学にお誘いしたら、先生は大変喜ばれ、「私は東京で点字普及後援会の会長をしているのだが、最近盲人でありながら手の不自由なために点字の読めぬ者には、テープレコーダーの会社ソニーと文芸春秋社の厚志で『文春』中のよい文章をテープに録音して各方面に送っているが、ハ氏病療養所にも送ってきているはずだから、その反響を直接病者たちから聞きたい。私は戦前は東京の全生病院などを訪問したことがあったが、近くは昨年山下清と一緒にアマミ大島に行ったので、その節、あの島のハ氏病療養所を見学したが、やはりこの病者たちほどの気の毒な者はないから、何とかして慰めてやりたい」と切々たるお言葉であった。(中略)盲人向の点字書にこれを(明石海人)翻訳したいと思うが、文章や歌が少しむづかしいから振仮名をつけてもらわねばなるまいと思う。(恵楓園で)先生は先ず自分とハ氏病者との因縁を語り、点字普及会々長として本園にも送ったはずの、テープレコーダーの効果に対する病者側の感想をたづねられた。病者側の批判が真剣であり、また内容に対する希望が意外に高いのに驚きかつ満足のようであった。また一人の盲人が「東京の点字図書館の蔵書」を何うしても私たちに貸出してくれないので、これをなんとかお願いしたい」といったのに対して、まじめ腐った顔で「ハイなんとか頼んで上げましょう」と半約束された。

12月1日発行 第3巻第12号=寄稿

本間一夫「日本点字図書館 感謝の集い」= 36-37頁

昭和35
(1960)

3月1日発行 第4巻第3号=寄稿

松崎元治「芸術の多角経営」= 45-47頁

(前略)、(式場から)日本点字図書館後援会の常任幹事等を依頼されて。

	<p>5月1日発行 第4巻第5号＝対談</p> <p>御手洗毅 (キャノンカメラ株式会社社長)・式場隆三郎「キャノンカメラの誕生」(3月18日キャノンカメラ工場の社長室にて収録) = 16-23頁</p> <p>※キャノンカメラ (原文のまま)。</p> <p>この対談の中で、20頁に「シンクロリーダーのこと」と題して、「シンクロリーダーの発明」等についての記述がある。</p>
<p>昭和 36 (1961)</p>	<p>4月1日発行 第5巻第4号＝寄稿</p> <p>本間一夫「点訳奉仕とお医者さま」= 26-27頁</p> <p>12月1日発行 第5巻第12号＝編集後記</p> <p>式場隆三郎 (11月10日付) = 64頁</p> <p>「忘年会やクリスマス・パーティの多い12月がくる。(中略) なお異色あるパーティが2つある。ひとつは日本点字図書館のもので、9日にひらく。これは私が後援会長でクラブの方々からひとかたならぬ後援をいただいて点字図書館の現状をみてもらうためと感謝の会である。盲人への福祉施設はたりないし、点字本とテープライブラリーも不足している。しかし、おかげでここまでできているというところをみていただきたい。そして一層のご支援を仰ぎたいのでこの催しを計画した。出席して下さる方があったら詳細をお知らせする。25万人の眼の不自由な人たちのために、このクラブの方々の力をかりたい。来年の記念行事の1つとしても、何かまとまった点字本とテープを寄贈したいものだと思っている。</p>
<p>昭和 37 (1962)</p>	<p>1月1日発行 第6巻第1号＝「クラブ通信」</p> <p>成川忠明「日本点字図書館のパーティ」= 66頁</p> <p>式場委員長が後援会長をされている日本点字図書館のパーティが12月9日、高田馬場勸銀ホールで開かれた。光りに恵まれない人人 (原文のまま) の唯一の外界への窓である点字図書館の充実を願って集まった人は約100人、予想外の盛會に、座席、食事、お土産袋などが不足して、主催者側は追加に大わらわ。パーティは式場後援会長のあいさつではじまり、本間日点常務理事、安田理事長のスピーチにつづいて軽妙な小野栄一氏の司会で、ショウの開始。(中略) また山下清画伯の色紙など、売り上げは全部点字図書館へ寄付されるとあって、売れ行き良好。かくて午後9時、この温かい心のこもったパーティの幕を閉じた。</p> <p>1月1日発行 第6巻第1号＝「クラブ通信」</p> <p>成川忠明「企画・庶務室より」(1961年12月3日付) = 67頁</p> <p>(前略) 12月の予定は、(中略) 9日、点字図書館のためのXマスパーティ (日本勸銀高田 (馬場) 支店ホール)。</p> <p>1月1日発行 第6巻第1号＝編集後記</p> <p>式場隆三郎 (12月11日付) = 80頁</p> <p>(前略) いよいよわがクラブの10周年の年がある。多彩な記念行事をたてているが、皆さんの御協力をえて立派にやりとげたいものである。事務局とともに、もう活動をはじめている。正月からは活発に動くつもりだ。この前に発表したプランの他に、新しく2つの行事をやりたい。1つは盲人のための点字とテープの</p>

仕事である。私は日本点字図書館の後援会長として働いているが、いまもっとも力をいれているのは児童用の点字本の製作である。これはライオンズクラブの協力で動き出しているが、成人盲者のために医学的な資料を提供する仕事をはじめた。盲人の職業の第1位は、あんまとマッサージ、それに鍼灸である。その人たちの求めているものは、医療的な指導書である。日進月歩の医学の知識にうえている。そこで1月からわがクラブでテープ（2時間用）を録音しておくりだすことにした。プランは私がたててお願いするからぜひご協力を。これはきっとよこばれると思う。10周年の仕事にして、毎月少なくとも1本はおくりだすようにしたい。鉄道弘済会の協力で日本点字図書館のなかにテープライブラリーができています。そこで、製作して医家芸術構成の医学テープをつくりたい。テープ文芸春秋が（原文のまま）毎月できてよこばれているが、医学テープができたならさらによこばれると思う。

2月1日発行 第6巻第2号＝クラブ通信

成川忠明「企画・庶務室より」（1月1日付）＝63頁

12月9日、高田馬場、日本勧銀支店ホール、点字図書館のためのクリスマスパーティ。これは一昨年後援会結成以来めでたく日本点字図書館の増築完成のお祝い。当夜は、テーブルショウ、一竜斎貞花の講談、水藤錦穰さんのビワ、富田東峰氏のハーモニカやチャリティオークション、加東大介、草笛光子、徳川無声、森繁久弥（原文のまま）、守田勘弥さんも見え、後援会長の式場さんもさすがにうれしそうであった。闇にとざされた不幸な人びとへの大へんなおくりもの。（中略）12月15日、銀座グロリア、定例委員会、委員長のほか津田、横尾、沼沢、岸、原三郎、伊藤行、真田、高橋希、矢崎氏ら各委員、来年10周年記念行事などの打ち合わせ、世界美術展、沖縄、ヨーロッパ旅行、盲人用学術テープ作成等。

6月1日発行 第6巻第6号＝クラブ通信

成川忠明「5月定例委員会」＝62頁

5月10日、銀座グロリアで定例委員会が開かれた。（中略）ついで10周年記念行事の進行状況と、盲人用医学知識テープ提供の件について審議された。

7月1日発行 第6巻第7号＝対談

池島信平（文芸春秋社専務取締役）・式場隆三郎「ジャーナリズムの世界」（5月24日・銀座グロリアにて収録）＝12-22頁

※文芸春秋社・文芸春秋（原文のまま）

式場：先日、文春のお世話になっている日本点字図書館の、盲人が30人ばかりうちの病院のバラ園を見にきた。盲人がバラを見るというのはどういうことかという、匂いをかぐし、われわれよりよっぽど楽しんだんじゃないかと思うのです。点字図書館の人に、盲人はラジオでは何をいちばん聞くと尋ねたら、野球放送が第一だといった。「文芸春秋」のテープ・マガジンでお世話になったね。あれはたいへん喜ばれているし、大変有益だと思っていますよ。

池島：光栄です。

	<p>式場：しかも新しいのをやるでしょう。テープになる本は古いものが多い。ところが文春のテープはその月のうちに新しいものがきける。</p> <p>池島：目でみる雑誌とあまり変わらないですよ。見本のできる前に渡しています。それから吹きこむから、せいぜいおくれても二、三日ですよ。</p> <p>式場：そうですね。早くくるのでみんな喜んでます。先年熊本の癩病院に行ったらお礼をいわれた、点字もありがたいが耳で大きく方がありがたいのです。ぜひつづけてくれとたのまれました。</p> <p>池島：できるだけやりたいと思ってます。</p>
<p>昭和 38 (1963)</p>	<p>1月1日発行 第7巻第1号＝名刺交換</p> <p>賀正：日本点字図書館・本間一夫 = 66頁 指先でもよ点字書と耳で大きく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町212／社会福祉法人日本点字図書館／常務理事 本間一夫／電話 (361) 3661</p> <p>3月1日発行 第7巻第3号＝寄稿</p> <p>谷 忠夫「手をむすぶ会誕生」= 54-55頁 (前略) 昨年7月に発足した「手をむすぶ会」は式場のとりなしで医家芸術クラブと文字どおり手を結びあえた。(中略) 色紙を主として、絵画、彫刻、書、その他を即売し、その純益を点字図書館に寄贈し、目下一番少ない児童点字図書、または録音テープの製作費にあててもらおうというのです。児童図書に不自由している盲児童の渴望にこたえ得るものとして、図書館側もたいへん喜んでおりますのでぜひとも立派な成果をあげたいと願っております。</p> <p>3月1日発行 第7巻第3号＝クラブ通信</p> <p>成川忠明「企画・庶務室より」(2月3日付) = 63頁 1月22日「手をつなぐ会」目のみえぬ子どもたちに点字本を贈るための資金かくとくのための色紙展の相談。</p> <p>5月1日発行 第7巻第5号＝クラブ通信</p> <p>成川忠明「おしらせ」= 62頁 手をつなぐ会主催、クラブ後援の作品展が5月3日から8日まで、東京大丸デパート催物会場で開催されます。これは会員の方々から作品のご寄付をいただき、その売上げを恵まれない盲人の点字図書購入費に寄付するもので、各位の絶大なお支援をお願いする次第です。</p> <p>5月1日発行 第7巻第5号＝編集後記</p> <p>式場隆三郎(4月13日付) = 64頁 第5回の慈彩会が6月11日から16日まで、日本橋の三越本店でひらかれる。これは各界で活動している方々で美術をたのしんでやっている人々の集まりで、作品を毎年展覧して売上げや作品を社会施設に寄付する運動をやってきた。これには初めから日本医家芸術クラブも参加してきたので、ご存じの方も多いと思う。(中略) この展覧会は、われわれの正業でない作品を福祉事業に貢献しようという趣旨でつくったものである。幸いに多くの方々の支援をえて、ことし第5回を迎えるわけである。クラブ員や知人の方々のご協力をお願いしたい。</p>

6月1日発行 第7巻第6号＝クラブ通信
<p>成川忠明「[手をつなぐ会]色紙作品展」＝62頁</p> <p>「手をつなぐ会」（徳川無声 会長）で主催した色紙作品即売会は、5月3日から8日まで、東京大丸デパート5階催し物場で開かれた。日本の代表的な画家のほとんどが参加され、作品130余点が集まり、クラブからも美術部の有志五十数氏の協力を得て作品をご寄贈いただき、売上げは全額日本点字図書館へ寄付された。</p>
8月1日発行 第7巻第8号＝名刺交換
<p>暑中見舞：日本点字図書館・本間一夫＝70頁。</p> <p>指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町212／社会福祉法人日本点字図書館／常務理事 本間一夫／電話（361）3661</p>

- (3) 本間一夫と加藤善徳の世界盲人福祉協議会参加費調達のため、式場隆三郎が渡米後援会結成した時期（1964年4月以降に発行された機関誌）

発行年	<p>寄稿文の場合：上段＝発行日／巻号／記事の種類、下段＝執筆者名／タイトル／掲載頁</p> <p>そ の 他：上段＝発行日／巻号／記事の種類、下段＝執筆者名／タイトル／掲載頁／該当記事</p>						
昭和39 (1964)	<table border="1"> <tr> <td style="text-align: center;">1月1日発行 第8巻第1号＝名刺交換</td> </tr> <tr> <td> <p>賀正：日本点字図書館・本間一夫＝65頁。</p> <p>全国22万盲同胞の読書センター／指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町212／社会福祉法人日本点字図書館／常務理事 本間一夫／電話（361）3661</p> </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">4月1日発行 第8巻第4号＝編集後記</td> </tr> <tr> <td> <p>式場隆三郎（3月16日付）＝64頁</p> <p>日本点字図書館の常務理事本間一夫氏が理事の加藤善徳氏とともにこの夏ニューヨークで開かれる第3回世界盲人福祉協議会の総会に日本代表として出席される。盲人の福祉事業のおくれている日本は、なんとかしなければならぬので、私は多年この図書館の後援会長として働いているが、こんどの本間氏らの渡米ですすんだアメリカの施設や事業をしらべてきてほしいと思う。しかし、点字図書館も後援会も資金が不足していて、本間氏らの旅費を出すことができない。そこでこのたび盲人福祉調査渡米後援会をつくって、ひろく浄財をあつめることになった。医家芸術クラブの会員の方々は、今までも点字図書館の点字本やテープの製作に助力されたが、こんどもぜひご支援願いたい。一口500円の一般会員と、一口5000円の賛助会員の募集をはじめた。一人でも多くの方々のご参加を切にお願いしたい。申込先は新宿区諏訪町212日本点字図書館である。どうぞよろしく。</p> </td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">8月1日発行 第8巻第8号＝名刺交換</td> </tr> <tr> <td> <p>暑中見舞：日本点字図書館・本間一夫＝67頁。</p> <p>指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町</p> </td> </tr> </table>	1月1日発行 第8巻第1号＝名刺交換	<p>賀正：日本点字図書館・本間一夫＝65頁。</p> <p>全国22万盲同胞の読書センター／指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町212／社会福祉法人日本点字図書館／常務理事 本間一夫／電話（361）3661</p>	4月1日発行 第8巻第4号＝編集後記	<p>式場隆三郎（3月16日付）＝64頁</p> <p>日本点字図書館の常務理事本間一夫氏が理事の加藤善徳氏とともにこの夏ニューヨークで開かれる第3回世界盲人福祉協議会の総会に日本代表として出席される。盲人の福祉事業のおくれている日本は、なんとかしなければならぬので、私は多年この図書館の後援会長として働いているが、こんどの本間氏らの渡米ですすんだアメリカの施設や事業をしらべてきてほしいと思う。しかし、点字図書館も後援会も資金が不足していて、本間氏らの旅費を出すことができない。そこでこのたび盲人福祉調査渡米後援会をつくって、ひろく浄財をあつめることになった。医家芸術クラブの会員の方々は、今までも点字図書館の点字本やテープの製作に助力されたが、こんどもぜひご支援願いたい。一口500円の一般会員と、一口5000円の賛助会員の募集をはじめた。一人でも多くの方々のご参加を切にお願いしたい。申込先は新宿区諏訪町212日本点字図書館である。どうぞよろしく。</p>	8月1日発行 第8巻第8号＝名刺交換	<p>暑中見舞：日本点字図書館・本間一夫＝67頁。</p> <p>指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町</p>
1月1日発行 第8巻第1号＝名刺交換							
<p>賀正：日本点字図書館・本間一夫＝65頁。</p> <p>全国22万盲同胞の読書センター／指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町212／社会福祉法人日本点字図書館／常務理事 本間一夫／電話（361）3661</p>							
4月1日発行 第8巻第4号＝編集後記							
<p>式場隆三郎（3月16日付）＝64頁</p> <p>日本点字図書館の常務理事本間一夫氏が理事の加藤善徳氏とともにこの夏ニューヨークで開かれる第3回世界盲人福祉協議会の総会に日本代表として出席される。盲人の福祉事業のおくれている日本は、なんとかしなければならぬので、私は多年この図書館の後援会長として働いているが、こんどの本間氏らの渡米ですすんだアメリカの施設や事業をしらべてきてほしいと思う。しかし、点字図書館も後援会も資金が不足していて、本間氏らの旅費を出すことができない。そこでこのたび盲人福祉調査渡米後援会をつくって、ひろく浄財をあつめることになった。医家芸術クラブの会員の方々は、今までも点字図書館の点字本やテープの製作に助力されたが、こんどもぜひご支援願いたい。一口500円の一般会員と、一口5000円の賛助会員の募集をはじめた。一人でも多くの方々のご参加を切にお願いしたい。申込先は新宿区諏訪町212日本点字図書館である。どうぞよろしく。</p>							
8月1日発行 第8巻第8号＝名刺交換							
<p>暑中見舞：日本点字図書館・本間一夫＝67頁。</p> <p>指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町</p>							

212/社会福祉法人日本点字図書館/館長 本間一夫/電話(361)3661

8月1日発行 第8巻第8号=編集後記

式場隆三郎(7月17日付)=72頁
 心からお礼をのべたいことがある。私が発案して後援会を組織しひろく数千人の方々をお願いした日本点字図書館の本間一夫、加藤善徳両氏の渡米計画はおかげで実現することになった。発起人をひきうけてくださった方々、役員をひきうけてくださった方々、それに応じて寄付金をよせてくださった全国数千の方々に心から感謝する。おかげで予定額の200万円が倍近くあつまったので、アメリカの会議や調査を終えたらヨーロッパの盲人施設もみてきてもらうことにした。近ごろこんなに多くの方々の善意がりっぱにみのったことはまれで、関係者一同感激している。すべての方々に礼状をあげたいが、匿名の方、わざと住所をかかずにとどけてくださった方々も多いので、この紙面をかりて厚くお礼を申しあげたい。

9月1日発行 第8巻第9号=クラブ通信

成川忠明「企画・庶務室より」(8月3日付)=63頁
 7月25日 式場さんが後援して尽力されていた日本点字図書館の本間、加藤両氏が、予定以上の募金額をえて夜のパンアメリカン機でニューヨークにむかった。後援会長に敬意を表す。

12月1日発行 第8巻第12号=寄稿

本間一夫「欧米をたずねて：盲人の読書問題」=33頁

12月1日発行 第8巻第12号=編集後記

式場隆三郎(11月14日付)=64頁
 行事の多かった1964年もやがてくれようとしている。思い出はつきない。そこでことしの忘年会は合同でやりたい。日本医家芸術クラブとグロリアソサエティ、守田勘弥後援会、それに日本点字図書館の4つの団体が一つになって盛大なものにしたい。共通の会員が多いし、お互いに親交を深めたいからである。そこで今度は福引や余興を計画しているし、楽しいものになると思う。いずれ近日具体案をつくってお知らせするから多数ご出席をお待ちする。

昭和40
(1965)

1月1日発行 第9巻第1号=名刺交換

「賀正」：日本点字図書館・本間一夫=67頁。
 指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館/東京都新宿区諏訪町212/社会福祉法人日本点字図書館/館長 本間一夫/電話(361)3661

2月1日発行 第9巻第2号=クラブ通信

成川忠明「四大合同忘年会」=62頁
 12月28日、午後6時から上の池の端、法華クラブにおいて、医家芸術クラブ、グロリア・ソサエティ、日本点字図書館後援会、守田勘弥後援会の合同忘年会がひらかれた。この4つの会の代表である式場委員長は、本誌前号にて既報の通り、病氣加療中のため欠席のやむなきに至ったのは非常に残念であったが、出席者150名を超す大盛会となり、定刻に岡山副委員長の挨拶ではじめられ、(中略)終宴ちかく勘弥氏がTV局よりかけつけられて、終始にぎやかに楽しく進行

されたこの合同忘年会も、横尾秋夫氏の指揮による「蛍の光」の大合唱を最後に散会した。

2月1日発行 第9巻第2号＝クラブ通信

成川忠明「企画・庶務室より」(1965年1月4日付)＝63頁

12月18日、夕刻、順天堂病院に式場委員長を見舞う。来週手術の由。(中略)

12月28日、上野、法華クラブ。医家芸術クラブ、グロリア・ソサエティ、守田勘弥後援会、**日本点字図書館後援会**の忘年会。会場はいっぱいのお客さんに満ちあふれ、夫人、令嬢ご同伴のお客さんが多く、美しく華が咲いたようであった。岡山副委員長の挨拶にはじまり、児玉岩治さんの奇術、木下華声さんのものまねなどの余興もあり、たのしい忘年会であった。

3月1日発行 第9巻第3号＝寄稿

本間一夫「欧米の民間盲人事業」＝55頁

6月1日発行 第9巻第6号＝「クラブ通信」

成川忠明「式場委員長全快祝いの会」＝62頁

昨年12月1日順天堂病院に入院し胃潰瘍の手術をされ、3月19日に全快退院された式場委員長のお祝いの会が4月24日午後6時から神宮前のコープオリンピック内の南国酒家で開かれた。主催は日本医家芸術クラブ、グロリアソサエティ、**日本点字図書館後援会**、守田勘弥後援会であったが、これに東京タイムズ社、大室ヘルスホテル、日本ハンドボール協会、日本盲人カナタイプ協会、日本精神病院協会、ライオンズ・クラブ、笑おう会、その他委員長の関係の諸団体や知人、友人が多数集まって、なごやかな会であった。余興で児玉岩治さんの手品が皆を笑わせ、それを山下清がまことにふしぎそうに眺めている光景が印象的だった。

6月1日発行 第9巻第6号＝「クラブ通信」

成川忠明「企画・庶務室より」(5月3日付)＝63頁

4月24日、原宿、南国酒家。式場委員長全快祝いの宴。200名以上の盛況。岡野英規氏、同窓の古賀忠道氏と並ぶ。宮田氏の熱弁が印象的。

8月1日発行 第9巻第8号＝名刺交換

暑中見舞：**日本点字図書館・本間一夫**＝69頁。

指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館／東京都新宿区諏訪町212／社会福祉法人日本点字図書館／常務理事 本間一夫／電話 (361) 3661

11月1日発行 第9巻第11号＝ていだん

本間一夫・加藤善徳・式場隆三郎「盲人福祉を生きる」14-22頁

※10月6日、式場邸にて収録

式場隆三郎が1965年11月20日午後零時30分に逝去された。享年67歳であった。

この計報は、11月25日印刷・12月1日発行『医家芸術』第9巻第12号(通巻第100号)の表紙を開けると差し込み記事「式場隆三郎委員長逝く」によって一報された。11月9日午前記された「編集後記」が式場隆三郎の絶筆となった。

(4) 補記 = 通巻 100 号以後の『医家芸術』に掲載された日本点字図書館に関連するについて

発行年	寄稿文の場合：上段 = 発行日 / 巻号 / 記事の種類、下段 = 執筆者名 / タイトル / 掲載頁 そ の 他：上段 = 発行日 / 巻号 / 記事の種類、下段 = 執筆者名 / タイトル / 掲載頁 / 該当記事
昭和 41 (1966)	<p>1月1日発行 第10巻第1号 = 名刺交換</p> <p>賀正：日本点字図書館・本間一夫 = 95 頁。 指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館 / 東京都新宿区諏訪町 212 / 社会福祉法人日本点字図書館 / 常務理事 本間一夫 / 電話 (361) 3661</p> <p>1月1日発行 第10巻第1号 (101号記念号) = 座談会</p> <p>11月27日 東京・青山斎場にて収録 = 座談会「式場委員長の死をめぐって」12-18 頁 病気に関係して、ご尽力いただいた順天堂の田中憲二教授からの話（死因など詳細に説明）。遺書がございました。式場先生は、盲人のことにも非常に関心をもたれて努力されていたので、もっともだと存じますが、遺書の中にも、どうか、目の角膜を寄付してくれということでしたので、お亡くなりになってから約1時間半後に角膜をいただきまして、アイバンク^{註4}に貯蔵しております。</p> <p>2月1日発行 第10巻第2号 (式場隆三郎追悼号) = 寄稿</p> <p>本間一夫「呆然自失」^{註5} = 26-27 頁</p> <p>8月1日発行 第10巻第8号 = 名刺交換</p> <p>暑中見舞：日本点字図書館・本間一夫 = 71 頁。 指先でよむ点字書と耳できく録音テープの無料貸出図書館 / 東京都新宿区諏訪町 212 / 社会福祉法人日本点字図書館 / 常務理事 本間一夫 / 電話 (361) 3661</p>
昭和 43 (1968)	<p>4月1日発行 第12巻第4号 = 寄稿</p> <p>山賀 勇「式場さんと私」 = 8-9 頁 (前略) 眼科の私にも関係ある日本点字図書館の後援会長や盲人のカナタイプ協会などにも力を入れた。(中略) 死去は(昭和)40年11月21日、享年67歳、もう三周忌になる。(小樽市)</p>
昭和 46 (1971)	<p>12月1日発行 第15巻第12号 = 寄稿</p> <p><特集 式場隆三郎追悼> (七回忌)「式場隆三郎の思い出」 本間一夫「式場先生を偲ぶ」 = 28-29 頁</p>

以上、今般の記事調査により収集した情報を機関紙『医家芸術』の「記事分類」の別に整理した(表2)。この機関誌に掲載された「日本点字図書館」に関連する記事の総数は35件を数えた。その内訳は、①座談会・対談・ていだん = 3件、②寄稿・投稿 = 7件、③クラブ通信 = 11件、④編集後記 = 8件、⑤名刺交換(賀正・暑中見舞) = 6件である。式場隆三郎が編集したこれらの記事は、1958年に発行された第2巻から第9巻にかけて掲載されており、「日本点字図書

館および本間一夫」に関連する諸情報をリアルタイムに読者と共有していた様子が浮かび上がってきた。

(1) 日本点字図書館後援会創立準備の懇談会を開催した時期（1958年11月以降に発行された機関誌）には、日本医家芸術クラブ10周年記念行事として、盲人用医学知識テープ提供に取り組む一方で、積極的に寄付を募って活動する様子が明らかになった。また、日本点字図書館と関係の深い企業であるキャノンカメラ（原文のまま）の御手洗毅（社長：当時）や文芸春秋社（原文のまま）の池島信平（専務取締役：当時）との「対談」を収録するなど、あらゆる編集企画を介して、盲人福祉へのまなごしを注いでいたことが明らかになった。

また、(2) 本間一夫と加藤善徳の世界盲人福祉協議会参加費調達のため、式場隆三郎が盲人福祉調査渡米後援会を結成した時期（1964年4月以降に発行された機関誌）には、第8巻第9号63頁の「クラブ通信：企画・庶務室より」に、「7月25日 式場さんが後援して尽力されていた日本点字図書館の本間、加藤両氏が、予定以上の募金額をえて夜のパンアメリカン機でニューヨークにむかった。後援会長に敬意を表す。」と記している。いかに、この渡米後援に尽力されたかを知らしめる一文であり、式場隆三郎と会員諸氏に深い感慨を覚える。

さらに、この(2)の時期からは、賀正、暑中見舞という季節の挨拶となる「名刺交換」にも参加していたことも判った。「日本点字図書館・本間一夫」という活字が誌面に登場する機会は、より増していったのである。

表2 式場隆三郎が編集した『医家芸術』に掲載された「日本点字図書館」に関連する記事について

掲載誌(巻) 発行年 記事分類	Vol.1 (1957)	Vol.2 (1958)	Vol.3 (1959)	Vol.4 (1960)	Vol.5 (1961)	Vol.6 (1962)	Vol.7 (1963)	Vol.8 (1964)	Vol.9 (1965)
座談会・対談 (小計3件)	—	—	—	1	—	1	—	—	1
寄稿 (小計7件)	—	1	1	1	1	—	1	1	1
クラブ通信 (小計11件)	—	—	2	—	—	2	3	1	3
編集後記 (小計8件)	—	—	2	—	1	1	1	3	—
名刺交換 (小計6件)	—	—	—	—	—	—	2	2	2
合計	0	1	5	2	2	4	7	7	7

(合計 35件)

2-2. 『医家芸術』における本間一夫による記述

これまで日本点字図書館が所蔵していた日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』は、「ていだん」が掲載されていた第9巻第11号の1冊のみであった(37頁の図1参照)。しかし、今般の記事調査の結果、本間一夫が執筆した寄稿記事が5件掲載されていたことが判明した(表3)。これは、本研究の記事調査から得られた特筆すべき成果といえよう。

表3 『医家芸術』に掲載された本間一夫による記述

掲載誌発行年	巻(号)	掲載ページ	タイトル
1958(昭和33)年	2(8)	42~43	「もっと点字の本を」
1959(昭和34)年	3(12)	36~37	「日本点字図書館感謝の集い」
1961(昭和36)年	5(4)	26~34	「点訳奉仕とお医者さま」
1964(昭和39)年	8(12)	33	「欧米をたずねて:盲人の読書問題」
1965(昭和40)年	9(3)	55	「欧米の民営盲人事業」

本間一夫による寄稿文5件の中でも、最も注目すべきは、1958年8月1日に発行された『医家芸術』第2巻第8号の寄稿文「もっと点字の本を」が掲載された時期である。

『日本点字図書館五十年史』の記録によれば、式場隆三郎が満場一致で会長に推されて就任した日本点字図書館後援会が正式に出発したのは1959年1月13日である。全国町村会館で開催された日本点字図書館後援会創立第1回発起人会に於いて正式に発足となっているが、前年11月7日に、式場隆三郎をはじめ、当時の厚生省安田社会局長、加藤更生課長、日本点字図書館理事長の金森徳次郎など21名が出席して、隣接地825㎡取得のために日本点字図書館後援会創立準備の懇談会を開催しているため(日本点字図書館50年史編集委員会1994:193)、この創立準備懇談会をもって、『医家芸術』第10巻第2号(式場隆三郎追悼号)の「式場隆三郎年譜・著作目録」の78頁には、「昭和33年11月、日本点字図書館後援会会長となる」と記されている。

本間一夫の著書『わが人生「日本点字図書館」』(2001年 日本図書センター発行)には、そもそも<いつ>隣接地問題が浮上してきたのかが垣間見える次の記述がある。

1997年11月5日NHKラジオ放送「人生読本」(聞き手:川野楠己)

『ゴッホの芸術とその生涯』という先生の書かれた本を点字に直してもらえないかというご相談を受けたわけなんです。ご縁はそれだけだったんですけどね。しかし、その先生に頼る以外ほかに方法はないということで、当時僕と一緒に仕事をやっておりました加藤善徳さんと相談して、式場先生のところに行って、「ぜひこの1千万円募金のための後援会をつくって、その会長になっていただきたい」というお願いをしたわけなんですよ。ところが、大した深いご縁でもなかったんですけども、先生は、もう本当に即座に快くそれをお引き受けくださいます、そして「1千万円募金」というのをスタートさせたわけなんです(本

間 2001 : 80-81)。

<『点字毎日』第 3530～3544 号 1991 年 3 月 3 日～6 月 16 日号に掲載された>

もともと、この高田馬場の敷地内には、北海道の本家がブロック造りの住宅を建てていました。しかし普段は空き家同様でしたし、テープの仕事は場所もないまま、その建物でなんとなく始めてしまっていたのです。ところが(昭和)34年の3月、突然本家から「財産税を支払わなければならない、建物 34 坪と土地 250 坪を 1 千万円で手放すことになり、もう周旋屋にかけた」と言ってきたのです。晴天のへきれき、私はすっかりあわててしまいました。もしそうなったらテープだけでなく事業全体の拡大発展はお先真っ暗です。加藤さんとも相談し、厚生省厚生課長の実本博次さんと精神科医として有名な式場隆三郎先生に相談しました。その結果、実本さんの斡旋で社会福祉事業振興会から 400 万円を借り入れ、あとは式場先生を会長とする後援会をつくって集めようということになりました(本間 2001 : 128-129)。

以上の記述から、「(昭和)34年の3月」と記された時期が誤植であれば、本間一夫が式場隆三郎に日本点字図書館後援会の会長就任について、内々に相談に行かれたのは、<1958年の3月～5月>の間だと推定することができる。

この「医家芸術」第2巻第8号は、印刷日が1958年7月25日、発行日が同年8月1日、式場隆三郎の編集後記は7月8日付で掲載されている。この第2巻第8号の編集企画は、おそらく2か月前、つまり、同年5月には寄稿依頼が配信されると仮定できよう。

式場隆三郎は、6月4日の06:10には、羽田空港を離陸したBOACの機上の人になっている(式場 1981 : 382)。「この年の6月、欧米視察の旅に出た。スイス、フランス、イタリア、ドイツ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、オランダ、イギリス、スペイン、ポルトガル、アメリカ、ハワイなどを巡遊し6カ月註6にわたる。ゴッホとロートレックの遺跡の調査、資料蒐集に力をそそぎ成果をあぐ」と自著の年譜に記している(式場 1961 : 274)。もはや本間一夫が式場隆三郎に日本点字図書館後援会の会長就任について、内々に相談に行ける機会は<1958年の3月～5月>の間でなければ、日程的に無理が生じる状況も浮かび上がってきた。

式場隆三郎は、本間一夫からの相談時に、その場で後援会長就任を受諾しているため、日本点字図書館の活動実態を把握するためのやりとりがあったらと推察することができる。したがって、そのやりとりを反映することができれば、『医家芸術』第2巻第8号の43頁の次の記述も可能である。

(前略)数年前、式場隆三郎先生が先生の自著、「ヴァン・ゴッホの生涯と芸術」の点字版をつくれ、ゴッホの故国であるオランダに送ったり、本館に寄贈されたりしたことがあります。その時、先生は「ぜひ著名な著者、あるいは出版社に財政的援助を依頼するよう」と、しきりにすすめてくださいましたが、まことに(原文のまま)卓見といわなければなりません。

3. 日本点字図書館への提言

1958年8月1日に発行された『医家芸術』第2巻第8号に本間一夫の寄稿文「もっと点字の本を」の所在が明らかになったのは、今般の記事調査の最後に、念のためにすべてのページを読み直していた時である。これは、まったく予期することができない驚愕の記事内容であった。

筆者は、最も注目すべきは、1958年8月1日に発行された『医家芸術』第2巻第8号に本間一夫の寄稿文「もっと点字の本を」が掲載された時期であることを前述したが、この寄稿文には、さらに極めて着目すべき点がある。それは、次の文章に筆者が下線を引いた部分である。

(前略) 数年前、式場隆三郎先生が先生の自著、「ヴァン・ゴッホの生涯と芸術」の点字版をつくれ、ゴッホの故国であるオランダに送ったり、本館に寄贈されたりしたことがあります。

まず、冒頭の下線部分、すなわち、本間一夫が式場隆三郎にはじめて会った時期については、すでに、『ゴッホの芸術とその生涯』を点字になおしてほしい、という電話をいただいた昭和27年であった」と述懐した追悼文より判明している(本間一夫1966:26)。しかし、次の下線部分、この点字本が「本館(日本点字図書館)に寄贈されたりしたことがあります」という一文には驚愕させられた。なぜならば、日本点字図書館が把握していた史実は、「本間一夫が式場隆三郎から点字本ヴァン・ゴッホの相談を受けた」という「できごと」までである。そもそもこの点字本がいつ完成し、式場隆三郎の手元に届けられたのか等についての情報は皆無に等しかったからである。

日本点字図書館は、創設者の本間一夫と式場隆三郎とのめぐりあいから70年の節目を迎える。今般の『医家芸術』記事調査の結果、式場隆三郎の「盲人福祉」へのまなざしは顕著に浮かび上がってきた。これを好機に、式場隆三郎の著書「点字本ヴァン・ゴッホ」の復刻版を作製し、日本点字図書館本間記念室が所蔵することを提言したい。

もとより「点字本」は指で読む書籍である。本調査で判明した「本館に寄贈されたりしたことがある」という史実を踏まえて筆者が期するのは、式場隆三郎著「点字本ヴァン・ゴッホ」の復刻への道が拓かれることである。

近年、尾本圭子は、パリ国立ギメ東洋美術館に所蔵されているガッシュェ家資料の中から「芳名録」を発見し、日本人のファン・ゴッホ崇拜について言及している。この「芳名録」の3冊目にあたる「出頭没頭」の署名者に連なる式場隆三郎に着目している(尾本2013:169-172、尾本2017:226-227)。今日もなお、ゴッホ研究者としての式場隆三郎に関心が寄せられていることに鑑みれば、日本点字図書館本間記念室に「点字本ヴァン・ゴッホ」を復刻させる意義をも見出す一助となろう。

おわりに

本研究の目的は、式場隆三郎が編集した日本医家芸術クラブの機関誌『医家芸術』にどのような日本点字図書館関連記事が掲載されているのかを把握することであった。そこで、式場隆三郎が編集した『医家芸術』通巻100号のすべてのページを読み進めた結果、機関誌『医家芸術』の記事分類の別に掲載された日本点字図書館関連記事の総数35件を数えることができた。特質すべきは、本間一夫による寄稿文が判明したことである。

1958年に発行された第2巻から第9巻にかけて掲載された35件の記事は、「日本点字図書館」に関連する情報を『医家芸術』の読者とリアルタイムに共有していた様子を彷彿とさせた。

本稿での未発表情報を時系列に精査して、式場隆三郎が「盲人福祉」に尽力した全体像を明らかにすることが今後の課題である。

〔註釈〕

- 『日本点字図書館五十年史』の感謝録「忘れ得ぬ人々」には、後藤静香（社会教育家、「心の家」主宰者：点訳奉仕運動この人に始まる）、加藤善徳（日本点字図書館理事：本間館長のよき女房役として）、松本征二（元厚生省社会局更生課長：社会福祉の未来を予見する力）、小林勇（(株)岩波書店会長（当時）：図書館を支えた出版人の良心）、式場隆三郎（式場病院長・医学博士：図書館の支援活動に情熱を傾けて）、川野圭泉（本名 若林修：朗読指導者：テープライブラリーの夜明けの時代に）について記録されている。
- 「日本点字図書館本間記念室委員会」の伊藤宣真、濱田幸子、川島早苗、渡辺明とともに日本点字図書館が所蔵する関連資料、写真などの資料収集を継続している。後援会の活動史を探求するためには不可欠である資料「昭和33年12月 後援会関係綴」の発掘に成功し、現在、分析中である。
- 日本医家芸術クラブの結成は、1953年8月31日よりオランダのハーグで開かれた「世界医師会第7回総会」と併せて開催される「国際医家美術展」に出品の勧誘があり、この呼びかけに答えて参加したことがきっかけである。このときの国内選考会に当たる展覧会（日本医師会主催、日本医事新報社後援）が同年6月23日から五日間かけて開催された。日本から出品された作品が第一位となり、この大きな成果を今後につなげようと、翌年2月13日に、日本医師会館に武見日本医師会副会長、美術展世話役の式場隆三郎らが参集し「日本医家美術協会」が発足した。美術だけでなく文芸などの芸術同好団体の一本化を図ろうということになり、「日本医家芸術クラブ」誕生した。式場隆三郎は推されて全体の委員長になった。1954年3月1日、日本医家芸術クラブの機関誌は、岡山の医文雑誌「七合目」に決まり、「綜芸」と改題して第1号を発行している。その後、東京で新しい機関誌を創刊することとなり、1957年8月の末に『医家芸術』が誕生した。

初代委員長の式場隆三郎は機関誌『医家芸術』編集の任にあたり、創刊号から通巻100号を発行した。

日本医家芸術クラブの現委員長は、太田 怜である（2004年～）。初代委員長 式場 隆三郎（1957～1965年）の後、二代目委員長 岡山 巖（1965～1967年）、三代目委員長 東 竜太郎（1967～1982年）、四代目委員長 原 三郎（1982～1984年）、五代目委員長 大石 武一（1984～2000年）、六代目委員長 大森 暢久（2001～2004年）と引き継がれた。また、機関誌『医家芸術』は通巻640号に達し、この間、医家美術展、写真展をはじめ、邦楽祭やドクターズファミリーコンサート、書道展など、芸術各部門にわたり活動を続けている。

日本医家芸術クラブの変遷は、同クラブのホームページ、式場隆三郎編『ゆかり』（日本医家芸術クラブ十周年記念文集、1963年日本医家芸術クラブ発行）、『医家芸術』〈クラブ創立50周年記念〉第47巻第8号等に詳しい。

- 人々の視力を守る事業はライオンズクラブ国際協会にとって根幹を成すもので、世界中のクラブがさまざまな関連事業に取り組んでいる。日本でもそれは同様で、特に長きにわたり多くのクラブが取り組んできた活動の一つが、献眼推進事業である。1958年に「角膜移植に関する法律」が公布され、日本における献眼及び移植手術が正式にスタートしたのである。日本ライオンズクラブは初期段階からその普及に尽力した。角膜の提供者（ドナー）と移植を待つ患者との架け橋となる「アイバンク」も誕生する。日本初のアイバンクは1963年、慶應義塾大学病院と順天堂大学病院に設立。同年中に大阪に、その翌年には岩手医大と、東京の読売光と愛の事業団に、アイバンク設立の認可が下りた。更に1964年には東京の六つのライオンズクラブ（東京、東京丸の内、東京千代田、東京関東、東京神田、東京霞ヶ関）によって、献眼運動の推進を目的

としたライオンズ・アイバンク協会が発足。「虎は死して皮残し、ライオンは死して目を残す」という勇ましいスローガンを掲げて心血を注ぎ、ライオンズ主導によるアイバンクの結成が勢いを増していた時期である。

5. 日本点字図書館後援会会長の式場隆三郎の訃報は、昭和41年3月に日本点字図書館が発行した『点訳通信』96報の1頁の「後援会長式場先生逝く」と題した記事に、今般の調査で判明した『医家芸術』第10巻第2号（式場隆三郎追悼号）の26-27ページに掲載された追悼文（本間一夫「呆然自失」）がそのまま掲載されていた。なお、追悼文「呆然自失」は、善本社より1997年に刊行された本間一夫の自著『点字あればこそ：出会いと感謝と』の「第1章 先覚者と恩人」に「式場隆三郎先生を偲ぶ」と題して再掲されている（本間1977：53-55）。
さらに、本間一夫生誕百年を記念して2015年9月に日本点字図書館より発行されたCD『生誕百年記念：声とエッセイで振り返る本間一夫』の「第1章 日本点字図書館の恩人」の「1-3 式場隆三郎先生を偲ぶ」にも収録されている。
6. 式場隆三郎は、自著「ゴッホ巡礼」では、帰国したのは、「10月28日の5時少し前に、羽田についた。日本時間の2時頃だった」（式場1981：683）と記述しているため、6月4日に出発してから帰国するまでの国外滞在期間は異なってくる。

〔謝辞〕

機関誌『医家芸術』調査を遂行するために、日本医家芸術クラブ事務局に多大なるご理解ご協力を賜りました。ここに記して深甚なる感謝の意を表します。

〔文献一覧〕

- 本間一夫（1966）「呆然自失」『医家芸術』第10巻第2号（式場隆三郎追悼号）、26-27頁
本間一夫（1980）『指と耳で読む：日本点字図書館と私』（岩波新書 黄版138）岩波書店
本間一夫（1997）「式場隆三郎先生を偲ぶ」『点字あればこそ：出会いと感謝と』善本社、53-55頁
本間一夫（2001）『わが人生「日本点字図書館」』日本図書センター
本間一夫（2004）「点字図書館」『世界盲人百科事典』日本ライトハウス、489-493頁
ライオン誌日本語版事務所（2004）「ライオンズクラブ」『世界盲人百科事典』日本ライトハウス、522-523頁
松井新二郎（2004）「カナタイプライターの普及」『世界盲人百科事典』日本ライトハウス、581-586頁
日本医家芸術クラブ機関誌（1957～1965）『医家芸術』第1巻第1号～第9巻第12号
日本医家芸術クラブ機関誌（1966）『医家芸術』第10巻第1号、第2号、第8号
日本医家芸術クラブ機関誌（1968）『医家芸術』第12巻第4号
日本医家芸術クラブ機関誌（1971）『医家芸術』第15巻第12号
日本医家芸術クラブホームページ <http://www.ika-geijyutsu.jp/htm/history.htm>（最終閲覧年月日：2021年11月3日）
日本点字図書館編集委員会編（1994）『日本点字図書館50年史』日本点字図書館
尾本圭子（2013）「ファン・ゴッホを夢見た日本人たち：ガッシー家の「芳名録」」園府寺 司監修『「ゴッホの夢」美術館：ポスト印象派の時代と日本』小学館、166-173頁
尾本圭子（2017）「オーヴェールへのファン・ゴッホ巡礼：ガッシー家の「芳名録」」園府寺 司、コルネリア・ホンブルク、佐藤幸宏編『ファン・ゴッホ：巡りゆく日本の夢』青幻舎、212-229頁
視覚障害人名事典編集委員会編（2007）『視覚障害人名事典：名古屋ライトハウス60周年記念』社会福祉法人名古屋ライトハウス愛育報恩会、119頁
式場隆三郎（1961）「年譜」『現代知性全集（49）式場隆三郎集』日本書房、268-276頁
式場隆三郎（1981）「ゴッホ巡礼」『炎の画家ゴッホ』（式場隆三郎選集Ⅳ）ノーベル書房、379-693頁
谷合 侑（1998）「第4章第1節 新職業開拓職能開発研究」『盲人福祉事業の歴史』明石書店、128-130頁